

524

196

和蘭始創 究理原
エレキテル

国立国会図書館



始



工本7M-63

橋本曇齋先生遺稿

和蘭始制
エレキテル

究理原

原本 府立大阪圖書館所藏

(非賣品)

たのは此樹である其形状書中の書圖に符合す



電気實驗の巨松

泉州熊取村中辰之助氏邸内に現存する大松樹で橋本疊齋先生の女婿環氏が雷電の日電氣を誘導し種々の實驗をしたのは此樹である其形狀書中の畫圖に符合す樹下に立つ者向て左より土屋民中氏大石氏小山氏熊取郵便局長（大正十年六月十三日撮影）



524-19

究理原 干行に就て

土屋元作

大正 14. 4. 20 印

南海鐵道線佐野驛の東北一里ばかりの處に熊取と云ふ村がある。取り元は熊通りで、紀州熊野本宮參詣の本道に當つて居た。此處に中と云ふ素封家があつて、現在の主人公を辰之助と云ふ。中氏は數百年來の舊家で、後白河法皇熊野行幸の途上御止宿になつたと云ひ今に當時の御門があり、土地の人は中氏を字して御門と稱する。此由緒があるところから辰之助氏の祖父瑞雲齋維新の際京都に出で、勤王有志に交り、王政復古のために盡力したが、肥後の川上玄齋等の偽作した横井小楠の論文を見て、皇室を蔑にするものと憤慨し、其徒に命じて小楠を要撃し之を殺さしめた事がある、其偽書は現に

刊行に就て

中氏に存在する。

瑞雲齋の父を中環と云ふ。文化年中大阪の橋本宗吉に入門し蘭學を修め、且つ橋本氏と共に電氣の研究に従事した。中氏の邸内に現存する數株の大松樹中、其書齋の前なる一樹、目通り廿一尺餘の周圍あるものは、環氏が雷鳴時に電氣の誘導を試みたものであつて、橋本氏の著はした**エレキテル**究理原に見ゆる松樹即其物である。但し現物の松樹は先年落雷のために其梢端若干尺を失つて居るから其形が少し違ふ。

余は大正十年六月十三日南海鐵道電氣課長小山茂君の案内と中辰之助氏の好意により、大阪毎日新聞社員大石泰藏氏と共に、此松樹を實見するを得、大に平生の渴を醫した。當時松樹の寫眞と共に其記事が大阪毎日新聞日曜附録に載つて居る。

余が此行を試みたのは、橋本宗吉先生に對する弔意に出でたのである。青木昆陽以來、蘭學を以て日本の學術技藝に貢獻した人は多いが、其中に橋本氏の如く傑出し、橋本氏の如く現代人に知られない人は無い。それは氏が**キリシタン**の嫌疑を受けて一時隱岐に島流しになり、氏の知人等皆連座を恐れて氏を知らざるもの、如く裝ふた爲め其事績が堙滅した、めと思はる。それにつき珍とすべきは、蘭學の大先達大槻玄澤の孫如電翁が記した綾鞠證文(誤證文)と云ふ一文の有ることで、橋本氏の師であつた大槻家にすらも、宗吉の終は分つて居無かつたのである。

綾 鞠 證 文

「偽に似たる眞を説くも、眞に似たる偽を説く勿れ」とかいふ俚言ありぞ。已れ如電は偽を説くの所存あらざりしも、某氏の言に唯だ信を置き、竟に一犬の影に吠へて、百犬、其聲に吠ゆるの偽を傳へしぞ口惜しき、

其偽は他に非ず「浪華人談」に載せたる「橋本宗吉の事歴」是なり、橋本氏は我が王父磐水の高足にして、西洋學を大阪に開き、大槻の四天王と稱する一人なり、今より三十餘年前已れ西洋學術の我國に傳來し其發達せる沿革史を作らばやと、材料を輯むる數十百種、又其學

藝を傳へし人々の傳記をも草したり、第一勲業博覽會に、其概略を示さんとして『日本洋學年表』と題して、一大幅を出し、衰狀など賜はりぬ、頓て其表を活字冊子とし二百部を印刷して同好に頒ちたり(明治十年十一月)

橋本宗吉、固より史中の一人なり、當初、其人の履歷を詳かにせざれば洞海老人に實せしに老人、語りけらく、大墟平八郎が切支丹妻を處刑せし折、橋本は連累の嫌疑を受け、奉行所へ引出され、糺問の末、其同類にあらば無佛と申渡されしに、宗吉は『西洋耶穌と申す宗旨はさる魔法幻術など行ふべき者に非ず』と述べしを、御禁制の邪宗門を心得居るは不届至極なりと、更に殿科に處せられしと傳聞す、予、此言を事實と信じ、洋學年表、文政十二年の條に左の如く記したり

橋本宗吉、邪教に連坐して殺さる、是れ乃ち影に吠へたる犬聲にして、爾來、刊行されし書にて『近世名醫傳』『洋學大家列傳』まで、皆其聲に吠へて、宗吉刑死と記せり、眞に似たる偽を説きし罪を恐ろしき、明治二十八年第五博覽會を西京に開かるや見物に出掛け、それより大阪に遊ぶの日、七月十五日と覺ゆ、松雲堂主人鹿田氏より、或書に故先生の御門人を見出したりとて、抜抄して示めさる、其文面は左の如し

橋本伯敏、名は鄭、伯軒と號す、俗稱宗吉、蘭學を大槻先生に受く、天保七年五月朔歿す、年七十六、墓は八丁目寺町念佛寺

予、一見して大に驚き、直ちに念佛寺に詣り、住僧に面會、其由を告げ、過去帳を檢せしに、葬禮文雄、天真居士、天保七年五月朔日、年七十四歳、車町橋本宗吉事とあれば疑ひなしと、夫れより墓地を一わたり捜したるも、石は見當らず、住僧も曾て見ずと言ひたり

天保七年丙申は、文政巳丑より八年の後にて、當時刑死ならざりしは言ふ迄も無し、想ふに切支丹妻の時は、百日押籠位の咎めならん、大墟とて學識ある人であれば、白石の『西洋紀聞』等は讀みもしつらん、耶穌教の魔法ならぬは、心得あるべきなり、されど、橋本が、言はずもよき事を言ひ世間に傳播せん事を慮かり、懲しめに罰せしならん、徳川幕府は耶穌教を嚴禁にせしかば、苟も此宗旨の事を口にするさへ、國賊となるなり、今日の如く交通便利ならざる時

代に在ては、江戸と大阪とは山海萬里を隔てたる他郷も同じ、故に切支丹にて御仕置と言へば無論、死罪と思ふなり、逆も今人が想像に出でぬ程の有様にてありき、されば、橋本處刑の風説も所謂、鉢小棒大に傳りたるは、其時代の人の頭には、眞實として、虚偽とは思ひも依らずなり

さて、松雲堂主人が、成書と告げしは『浪華人傑談』にて、此書の作者は、政田義彦とて大阪の人なり、此書は、二十八年西遊の折、浪華の松雲堂にて一見、賣本に非ざれば寫取たしと言ひ置きしが、本年七月、松雲堂來りし時に、談又此筆に及び、其歸坂の後に、一部賣物ありと言ひ越したれば、直ちに購ひ收めたり、此書を斯く迄欲しと思ふは、橋本宗吉が、刑死に非ずして天命を保ちし事を證せんが爲なり

明治三十四年九月五日到着即記

如 電

此事は余も親しく如電翁から聞いた事で林洞海記臆の誤に基いたものである。隱岐に流されたこと云ふは、如電翁が後に發見せられたものと思はれる、余には然様に語られた。

今微に残る記録によつて橋本氏の略歴を考ふるに、天保七年七十四歳で死去から推算して其出生は寶曆十三年に當る。初の名は宗吉後鄭と云ひ、字は伯敏號を曇齋と云ふた。其家は大阪北堀江とばかり委しくは分らぬが、生業は傘屋(恐らく提灯も張つたであらう)で幼少

の時父を亡ひ老母を奉じて家業を勤めて居た。天性非常に記憶力に富み、注文を受くる諸家の紋を盡く記憶し、決して誤らなかつた云ふことである。富田屋橋北詰の十一屋五郎兵衛は天文を麻田剛立に學び彼の寛政の改曆御用の爲め同門の高橋作右衛門と共に幕府に召出され、名字帶刀を許され間大業又長涯先生として日本の學術史上に異彩を放つ人であるが、橋本氏は多分其出入であつたであらう學問を好むことを長涯に知られて居た。時に偶ま京都から蘭法醫學執心の醫師小石玄俊が大阪に移住し、長涯と親しく往來する、此兩人共蘭説を聽く事を好むが、大阪には未だ蘭書を讀む人が無い。誰か適當な人を得て江戸に遊學させたいと相談する中、長涯が橋本の事を思ひ付き、玄俊と謀り、資を給して大槻玄澤の門に入らせた。宗吉此時二十六才寛政元年の事であるが、老母を獨り家に残して長日月の留學は出来ぬから暫時の暇を乞ふて東上したが、何が倍非常

の記憶力を以て居ることであるから、蘭學も容易く出来る。何でも六箇月の中に四萬言を暗記したと云ふ事である。それから大阪に歸つて蘭法の醫書を讀み、傘屋を廢業して醫者になり、塩町に轉居して開業し、傍ら恩人なる長涯や玄俊の爲めに蘭書を翻譯し又自から著述に従事し且つ蘭學の教授をやつたが、當時關西の唯一人で從遊者も澤山にあつた。

宗吉先生は醫業も餘程上手であつたと見えて、鰻谷の住友は其職人の治療を橋本氏に托して居た、其記録は住友家に残つて居る。然し元來學者肌の人と見えて、治療より醫藥に關する研究に熱中し、澤山の著述を成して居る。其多くは今日に傳はらないが、僅に遺つたものを見ても、其篤學な迹が歴然と見ゆる。余は其著「蘭新譯地球圖」「三方法典」の二書を所持するに過ぎぬが、此外に「西洋醫學集成寶函」廿四卷「泰西方艸」百卷其他數種の大著がある。

究理原は元大槻如電翁の所藏であつたのを、大阪圖書館長今井貫一氏が寫し取り、九州大學圖書館も一部其寫を藏する由(大槻氏の書も原本ではなかつた大正十二年の震火に焼失した)余は先年懷徳堂で橋本氏の事蹟を講話するに際し、始めてこれを一讀し、其研究力の盛なのに驚いたのでたつたが、考へて見れば橋本氏は多分此電氣の研究のために**キリシタン**と思はれ、大鹽平八郎の調べた豊田貢一件の側杖を食つたものであらう。實に氣の毒な事である。偕日本で最も早く電氣の事を書いた本は後藤梨春の「紅毛談」で、又最も早く電氣を取扱つたものは平賀源内の鳩溪先生であつたが、其頃は唯不思議なものとして娛み半分に玩んだゞけで多少醫療の意味はあつても、先づ今人が蓄音器を弄ぶやうなものであつた。眞に醫療に使つたのは遙か後に佐久間象山が**ガルハニ**電氣を起して細君の吐瀉病に試みた外、余は記録のある事を知らぬ。象山は又磁石を作つて其磁力の強

弱により地震の起るのを前知する實驗を行つて居るが、橋本氏は象山よりも前に電氣によつて、天地間一切の不思議を説明し得べしと論じて、學術草昧の世に珍らしい卓見を示して居る。

又電氣と云ふ譯語は、維新後に出來たもので、其以前は**エレキテル**と云ふて居た。宇田川榕庵の「舍密開宗」川本幸氏の「氣海觀瀾廣義」などには其頃の蘭人の所説を受けて、越素と云ふて一原素にしてある。慶應年間越後人廣川魯と云ふ人「三原素略説」を著はし温光越を同一物であると論じたのは奇抜であつたが、其頃までも**エレキ**は尙越素であつた。然るに橋本氏は既に**エレクトル**即ち希臘語の琥珀から思ひついて魄力と譯し、良導體不良導體を無魄力有魄力と云ふて居る、又肥前の不知火につき當時の町人學者山片蟠桃は海中の火山に原因すこの新説を「夢の代」に書いて居るが橋本氏は不知火も電氣の作用であると論じて居る。今日物理の研究が進んだ眼から見れば、橋本氏

の説などは笑ふべきものが多からうが、文化年中に在て橋本氏程の研究と論斷は決して尋常人の企て及ぶ所ではない。

橋本氏は其實験にライデンジャーを用ひて居る(百人嚇と名付く)此ジャーは和蘭ライデン大學の教師ミュツセンブルツク(一六九二—一七六一)の發明に係るもので、フランクリンが之によつて種々の實驗を行ひ、硝子樹脂と呼ばれた電氣の二現象を陰陽と改稱し、又二流體説(Two fluid theory)に反して一流體説(One fluid theory)を考へ出したのは有名な話である、フランクリンの此發見は一七四七年で、橋本時代即ち文化年間に先づ事五十七年である。翌年フランクリンはライデンジャー中に起る閃光と、電光とが同一の電氣的現象であるだらうとの考へを發表したが、それに基いて佛蘭西の學者マルレーが四十呎の鐵竿の尖つたのを空に向けて立て、雷雨の中電氣を其竿に誘導することに成功した後七年して有名なるフランクリンの風の實驗が行はれた

橋本氏や中氏の行つた空中の火を取る實驗は即ちこれを學んだものであるが、マルレー以後五十六年東洋の一角に此類の學説を松樹によつて試したものの有らうとは、今日まで世界の學者の知らぬ事であらう。而して西洋でも電氣説の進歩は橋本氏と同時代位から盛になつたので、英人ウォールが電氣火花及其音響と電光雷鳴との比較を行つたのは我が文化四年即ち一八〇七年である。又英國人グレーがホイーレルと共に電氣傳導は物質の外観に由らず構造如何に由るものなるを論定し、導體と絶縁體と有る事を發表したのは一八二七年即ち文政十年である。此グレーは子供を絹糸で空中に吊し又樹脂の薄板の上に立たせて絶縁の實驗をしたと云ふが、橋本氏も樹脂を充たせる函を用ひて居る、楠盤即ちそれである。

余は昨年十月大阪電氣俱樂部の求めに應じ、此學界の珍書と偉人とを紹介した。其後親友電氣専門の三崎省三君に其事を話した處、大

に橋本氏の書を珍とし之を印刷して普く知人間に配布したいと云ふことになつた、誠に有難い思ひつきであるから、直に今井大阪圖書館長に請ふて其書を寫し、斯く活字に附すること、相成つた次第である。余は紹介人たる縁故を以て茲に橋本氏の片鱗を畫き、大松樹の寫眞と共に卷頭に置いて讀者の御參考に供する。而して余は中氏の邸内に橋本氏及環氏の爲めに一の記念碑を建てたいと思ふが、これは兎も角學界好事の諸君一度熊取村に往いて、此珍らしい大松樹を見、古人の骨折を偲び給へと先づ御勧めする者である。

【大正十四年一月廿八日】

序

西洋有一奇器。號曰越禮紀低兒。我邦人不知其爲何物也。或曰療器也。或曰玩具也。抑氣者質之精微也。水土者質之粗顯也。齊是一物。而人不生疑於水土。而生於氣。此徒信所見。而疑所不見也。故有以氣爲使用者。則必聳然恠之。甚則至以爲君子所不可近焉。悲夫。吾友橋本伯敏。能讀西洋書。旁好星學。一日得西洋書中。說彼器物者。譯之。乃試其言。一一得其實。伯敏大喜。自謂。當今人。皆愛精微之說。是以不好西洋書者。幾稀。然其傳之未博者。以其言之實否未明也。如夫以此證之。則其言之實。而其器之有用也。人人可知矣。豈不愉快乎。因舉其所試。記以國字。且交以圖畫

使衆易了解其意。苟讀此書者。用其器之法。闡然而所要之義。可直領會矣。於是乎。梓而傳焉。予亦以同好。敢冠一辭云。

文化辛未仲秋望日

和泉 萬町伏素狄

附言

一 **エレキテル**てふ器我朝へ安永年中に阿蘭陀國より舶來て人の體より火をいだす奇なる物なりき其頃より俗間に流布し工人の手に種々裝飾して都鄙に涉り普く人の知る處なれども其道理暨つかひ様且其効の著明きことを委しく知る人稀なり予癸歳の頂山中氏なる人家藏する處の**エレキテル**を預りて且弄び且試みておもへらく此他猶効驗あるべしと然れども其頃は蘭書を學ぶ志もなく徒らに過しぬ近來行はるゝにより予も此道に志し頗る蘭書を讀習ひ有益の醫術採藥修治煉丹の書を譯せし行餘に「**ボイス**」「**ナチウル**」などの必備の書を讀むに至り初めて**エレキテル**の翫弄物にあらざるを知る夫**エレキテル**は天地の大なるより罌粟毫末の小さきに至る迄其理を諭し風雨雷電地震流星等を目のあたりに顯はし掌中に試みらるゝ事にて咫尺の間に一小天地を縮めば禮樂仁義道學の羽翼もなしぬべしと陰陽升降の理

易の活動を論ず秘訣を附録一卷を委しく著し童蒙困學の悶を吐くべき楷梯とす此書を見て易の活動を象に見て究理せば朝暉初て戸牖を穿て億兆の宿眠一時覺るに等しからん歟今予が口つから門人に記さしめ且畫者に有りのまゝを寫さしめ理會し易からしめん計りて文法の亂がはしく叶べからざるを見ん人予が偽らざるにかねて幸にこれをゆるせといふ

曇齋鄭誌

阿蘭陀始制
エレキテル 究理原 卷之上 目錄

- エレキテルの道理を知る圖說
- 同製造の法並名義の辯
- 同箱の内滑車の圖
- 同簡易造様並圖
- 同組建てたる新制全形の圖
- 同有魄力無魄力の辯
- 發風子さてフラスコより風を吹出す圖說
- 唧鳴子さてフラスコを鳴らす圖說
- 百人様の圖
- 襖こしに百餘人を肝をつぶさせる圖說
- フラスコの水にて人を肝消させる圖說並電を顯はす圖

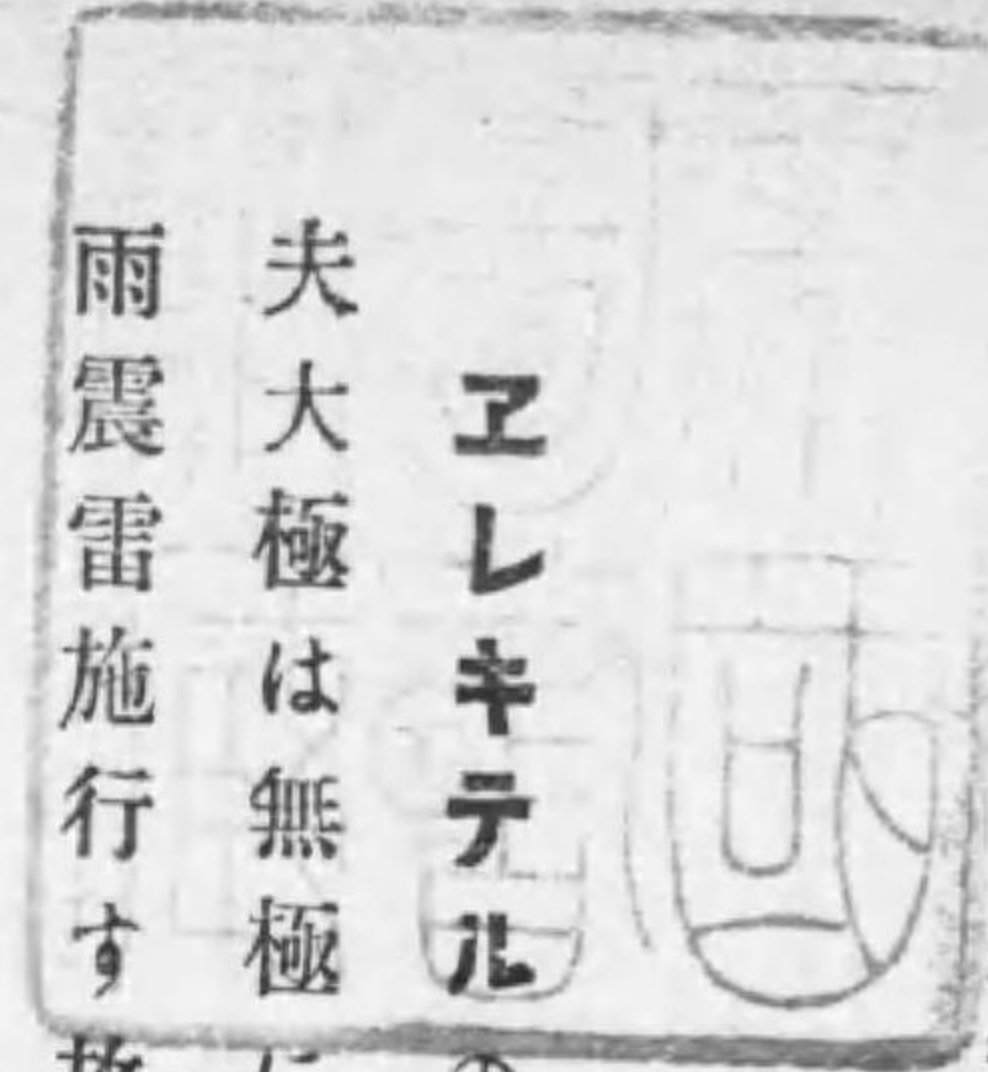
○連綿火にて八間のくさりに火をはしらす圖説並火柱の辯
 ○フラスコの内へ雨氣をよぶ圖並雨の辯

阿蘭陀始制
 エレキテル

究理原 卷之一

皇和 曇齋橋本鄭先生口授

受業 平田稔則政筆記



エレキテルの道理を諭す圖説

夫大極は無極にして唯一理のみ既陰陽舛降して水火剛柔を分別し風
 雨震雷施行す故に萬物資生象形を以て運行して不休然を是以今古水
 火を恐るゝと雖氣土を懼れず譬ば洪水回祿の稀に有つて限ある變動
 を恐れて却而地震の山岳を傾覆崩滅して海波桑田の變を顯はし雜氣
 の疫癘流行して一村一邑人語を聞かざるに及ぶを懼れず全これ國
 にして堯風蕩々舜日熙々たるによればなり乍然昇平に武備を忘れ
 餘に飢渴の貯をなすことは遠き慮にして聖代豊饒の士民の専務

豊
 ず有

たる

べき歟粵に泰西歐羅巴の「エレキテル」たるや賢愚皆偏に翫弄の器のみ思へり全「エレキテル」は爾あらず天澤火雷風水山地の理を發明する楷梯のみならず病を癒す奇効ある事既に「ボイス」「蘭書の名なり全部十篇にはあり大に益有る書なり」「ウーヘンスコラル」「蘭書の名なり」には瘡を截と卒中風及中風を治することを擧「ウーヘンスコラル」「蘭書の名なり」には瘡を截とを出し其外微毒に用ひ眼を療すなど有大活物の器にて翫弄一偏の死物器ならず夫「エレキテル」は別の仔細なし唯硝子を磨ぬくめて其氣を起す計りなり今左の圖にてざつと道理を知るに足りぬべし先硝子の大ききものに對すれば五六寸の間を隔て拮抗して騰降踴躍するものなり織出蝦夷錦といへる書に平賀源内は紙雛の袴にて硝子をぬくはんとしてはじめ「エレキテル」を發明せりといふ説あれども甚だ信じ難し今此圖は蘭書の「ボイス」「ナチウル」等より摸し出せり彼國にては往古

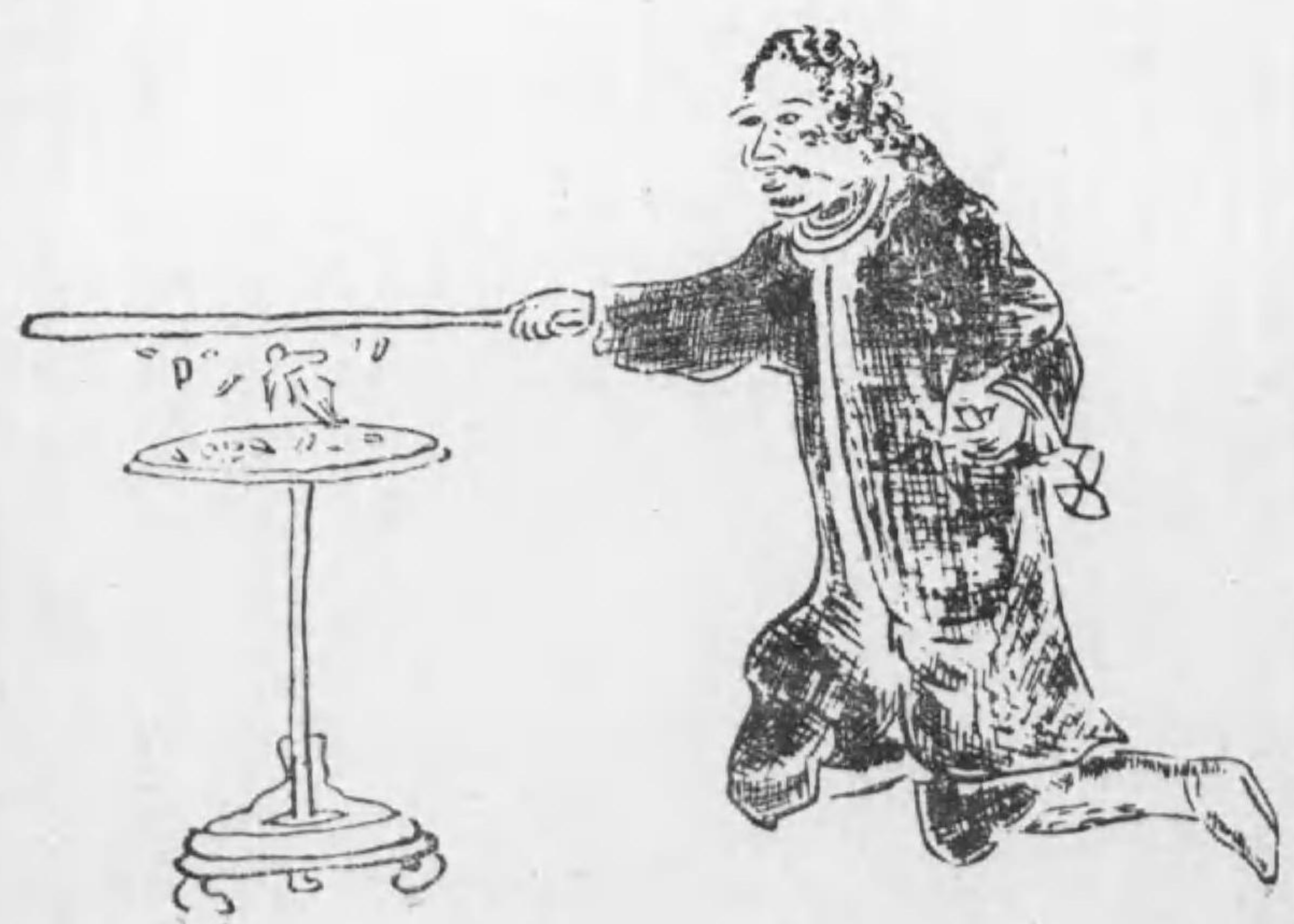
より有こそ

エレキテル製造並名義の辨

楮右に圖する如く硝子をすり暖むるとききは氣を起すに依て猶これを器に造りて溫動さすれば其氣彌強くして火を生ずるに至るなり則製造法左の圖の如し

○此器を「エレキテル」と號ることは傳聞の謬訛なり

蠻語にては「エレクトラム」とて本は琥珀のこごなり其氣琥珀の物を吸ふに似たるゆへ號ごなり譬ば本朝にても石を截る具を立翁「げんのおう」ご云酒器へ酒を受

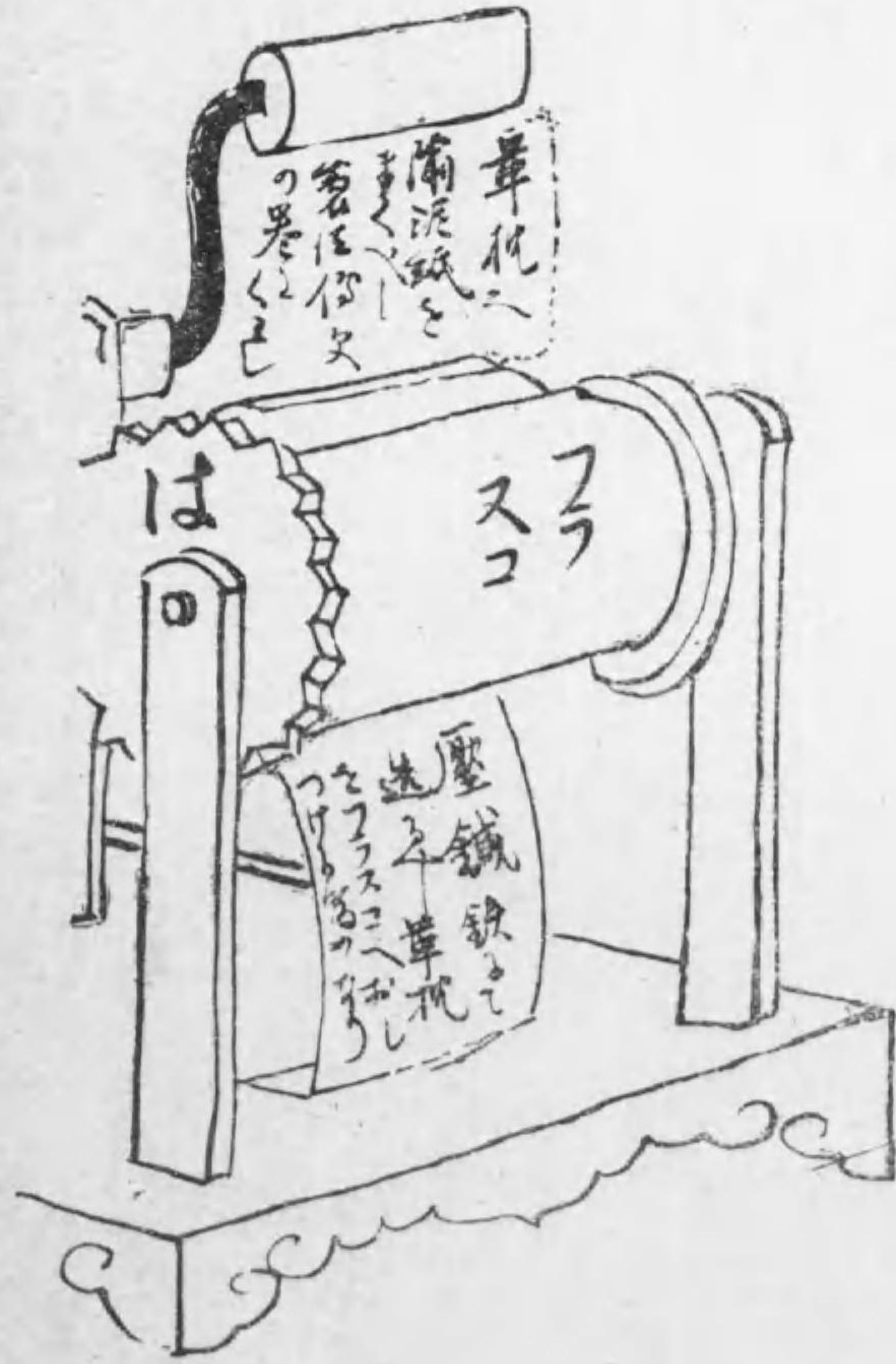


納る銅器を上戸と云ふがごごく其物の態すがたの等しきを以て號なづかくると和漢には例多し「アレキテル」をば蘭書にては「アレクトリシテイト」又「ブランドステンガラクト」と云となり是によりて我輩アレキテルを魄力車と喚びアレキテルの氣を魄力と呼ぶ

アレキテル箱の

内滑車の圖

フラスコは阿蘭陀舶來の磁形さねたの青ふらすこ
如此百八九拾目計りなるを金剛砂を以て口を切底きぞをすりぬきて用ゆるなり



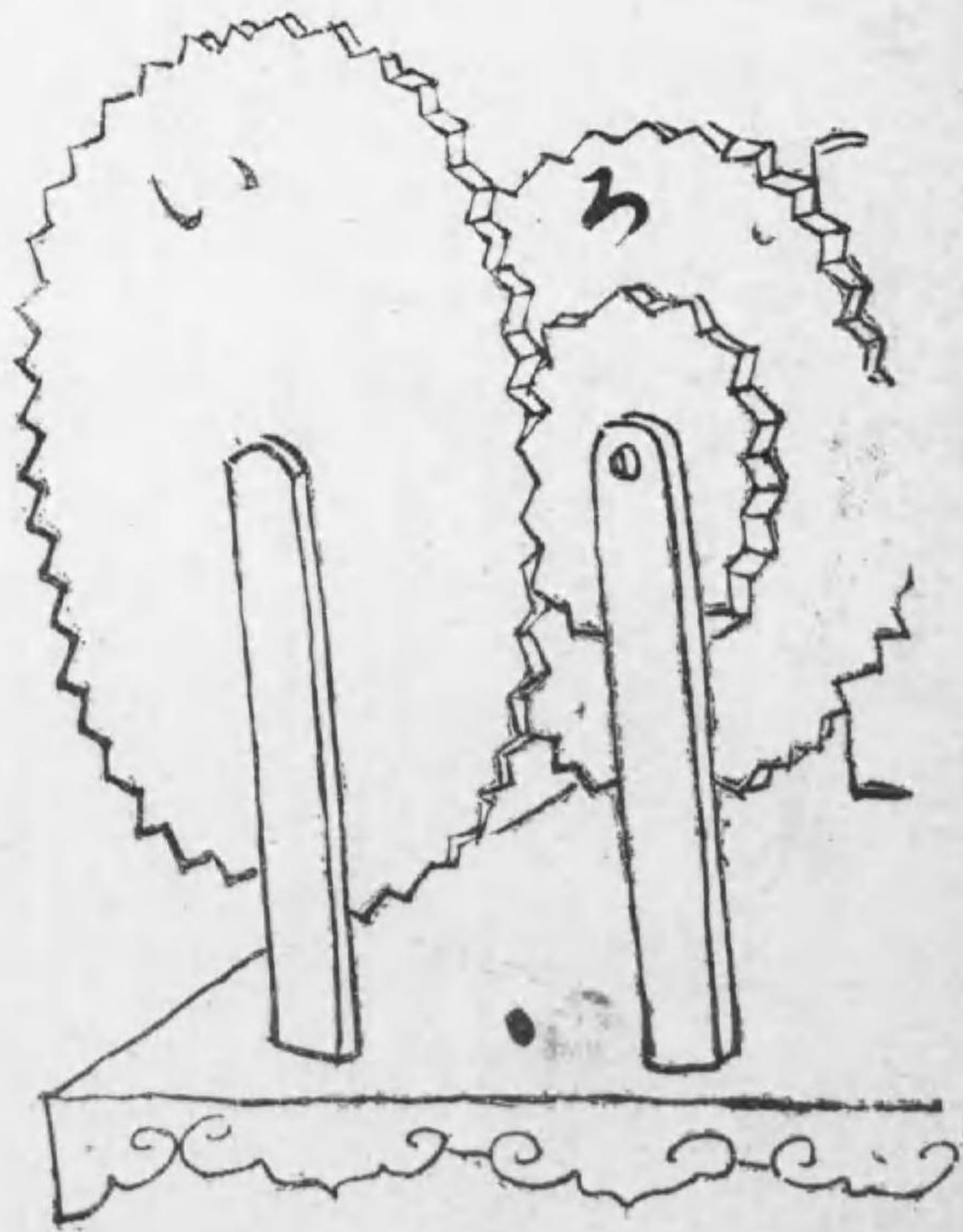
まはし木鐵にて造り木の柄をさし用ゆべし

凡い印の車一轉すればろ印の車五轉しては印の車二十轉するなり

此圖は鄭先年東都游歴のささ松原右仲と云人の造りしを摸し出すなり

右の圖の車を靜に五六十轉すればフラスコ碾轉きしりまはりて氣を

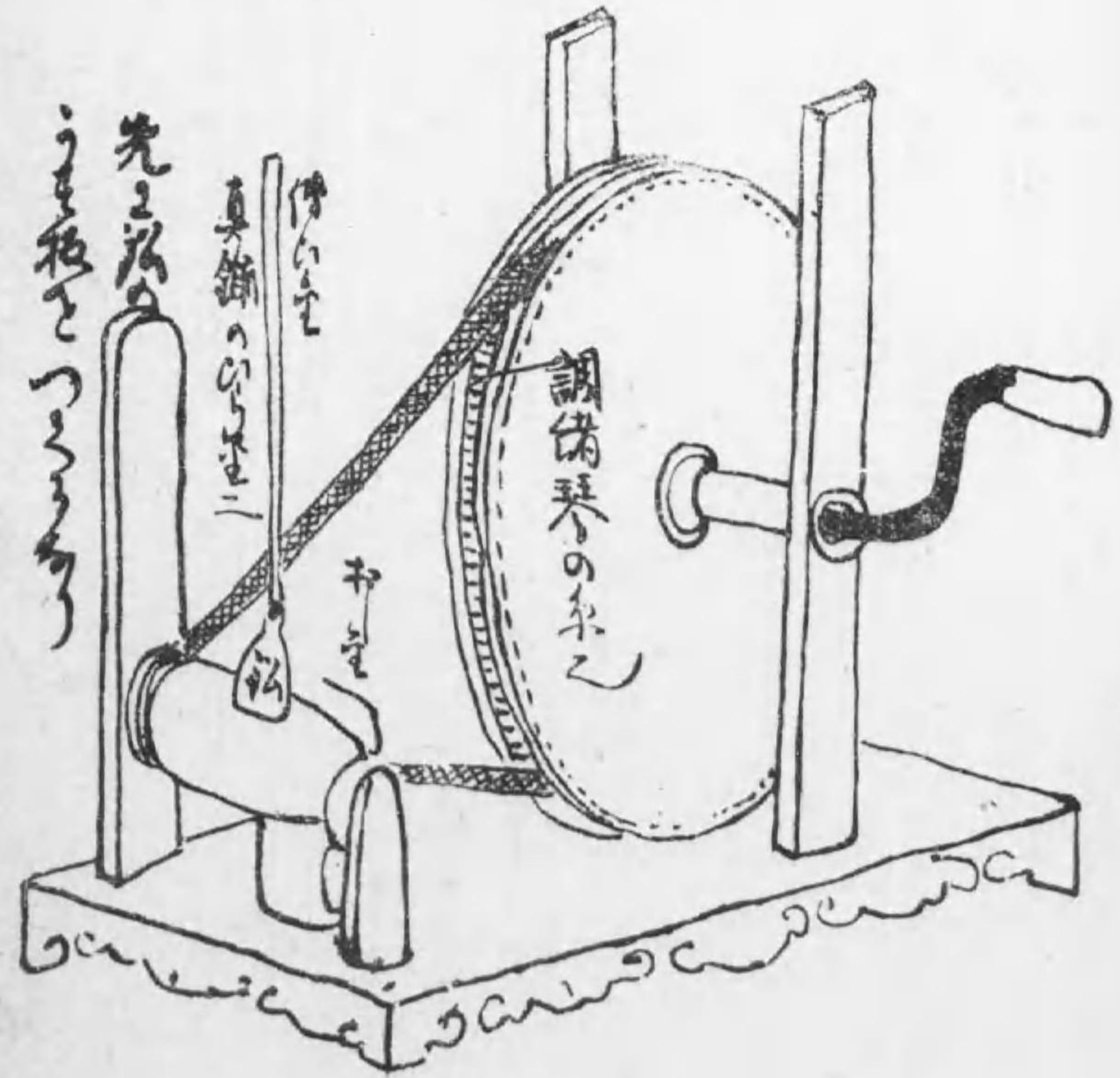
起すなり此ときフラスコの側貳歩計除け指頭をよすればじりく鳴て指頭に觸るものあり暗中にてこれを見れば火の如く光るなりこれを左の圖の傳ひ金にて上へ傳へるこさなり



同簡易なる造法

此法は器用なる人手細工にて造るものにして其形容恰も紡車の如く大なる板の溝車を製り此溝に琴の糸を以て圖の如く調をかけフラスコにも脇差の鏝程なる溝車を如圖仕委せ早緒を掛るなり板車一遍轉は凡フラスコ七八遍轉るなり扱これを次の圖の如く箱に納るなり

早緒は木綿糸の打紐を用ふ



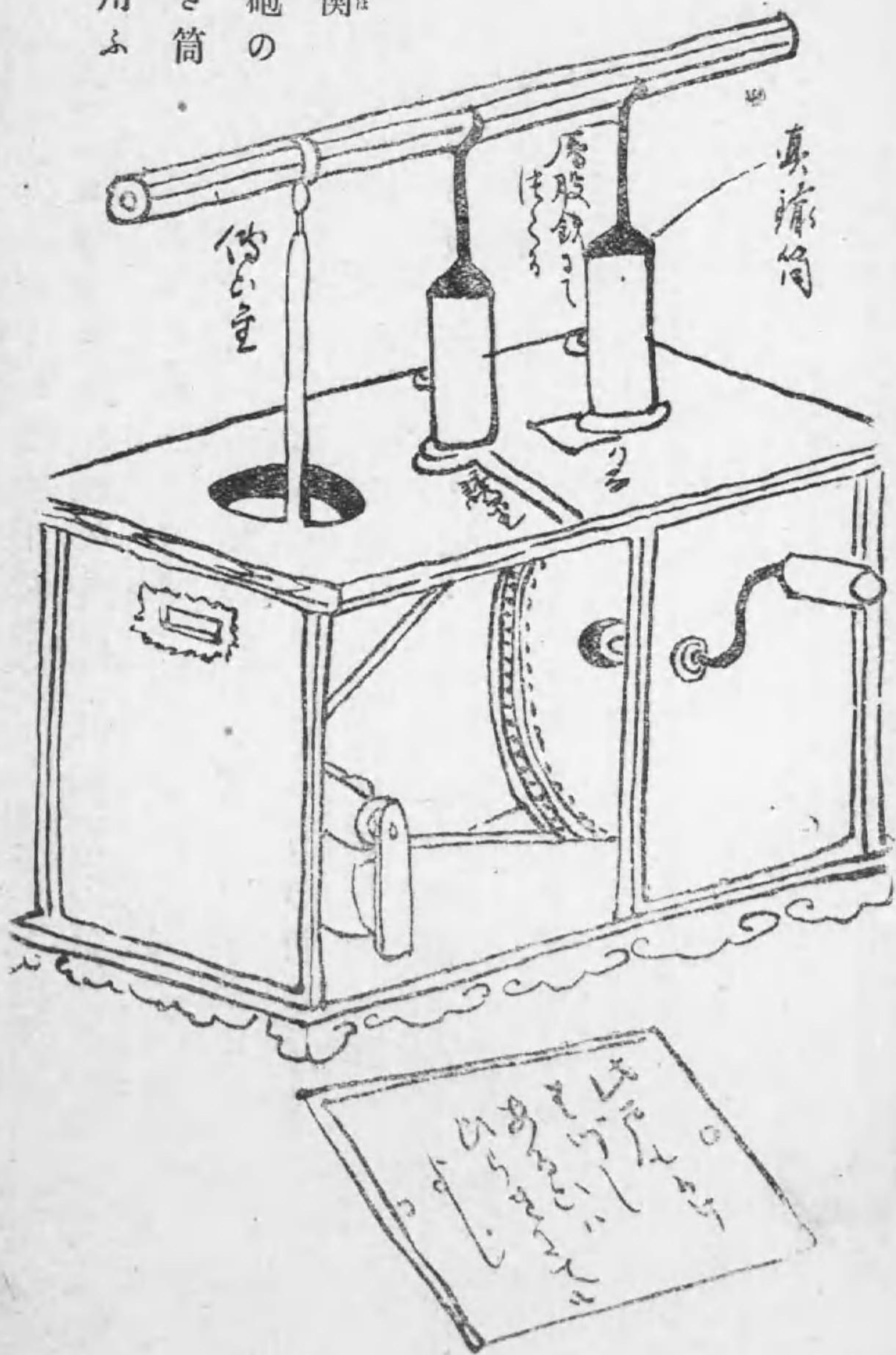
同組建たる新製全形の圖



此圖鄭が拓造せし新製の器なり 眞鍮の筒小口壹寸七八分堅六七寸底を設け正面に環ありて箱の上に貳本立るなり各筒の中に瀧を沸して流しこみ^{「股」}の下を焼て筒の中程まで差込むなり瀧の焚き様口授の部に載たり扱眞鍮の^{「誘金」}を一方の筒にはめ是をば自由自在に轉はり易くして傳金に觸れんが爲なり

○箱の正面の板も懸はずしなり是は早緒を緩急せんが爲の設け有を自在にするなり

鐵衡
鐵砲の
古き筒
を用ふ



エレキテル外箱正面の板

縦曲尺一尺三寸

尺 貳 尺 曲 横

覆載之間道體无二乾坤
既判坎離乃備自然者理
主宰者帝流行不息民生
以濟迷矣西土世久人智
探頤素隱制斯神器輪
轉玉磨造化洩祕非戲
非玩實物實事擴而施
用爲國之利好而惑衆
造世之累 小竹題

箱の大きさに準據すべし

右の圖にあらわせる處の輪回木を取て凡百五十遍斗り左轉せばフ
スコの氣傳金より傳ひ昇りて鐵衡雁股迄至るなり但し眞鍮筒へは
に縁を阻られて傳ふこと能はず扱鐵衡鴈股傳ひ金等に指頭又は金物

類を二三分ばかり側まで近くればちくくとなりて火の糸を顯はすなり或は紙人形を掌に這はせ鐵衡の下へ二三寸あらけて近寄れば吸つ弾きつして躍るなり實に琥珀の塵を吸ふに似て是をば前にもいふ如く阿蘭陀の書には琥珀の力と云琥珀の辨は奥に委し外の品にても此氣を含蓄あるものを有魄力とし此氣なき品物を無魄力といふ
 ボイスと云人の著書に有無魄力品を分たり
 ○有魄力の品左に列す是はミユツセンブルウクと云し人の撰める處なり

諸玉璞	石類	水晶	石英	諸樹脂
硫黃	赤信石	諸鹽	礬石	硝子
磁器	乾草	木材	漆網	飾綠
綿糸	紙	木葉	固楯	制瀆
古終	羽翼	毛髮	諸角	諸骨

象牙	鯨	鬍	皮革	部面
甲介	繭	乾腸の弦線		諸膠
封蠟	公雞	猫	狗	

等なりといへり鄭按するに右の品類こころく火を起すにあらざれども自己に魄力あるによりて**アレキテル**を避けて受けず故に縁を斷つに用るによろし扱謂處の玉石は金と撃て火を發し水晶は硝子に類し樹脂は琥珀に屬し硫黃は手摩して物を吸ひ又無魄力と撃て山を焼く信石亦此類なり諸塩とは焰硝朴硝等をいふ温泉に湧出る礬石の類なり磁器は伊萬里本山南京等は疊にすりて物を吸ふ木材は相摩れて自ら炭となる殊に檜の鈹屑こけ壁障子かき天井裏等に吸付魄力盡ればおのづから落るなり又腐たる木は夜光を現はす腐草螢となるといへば乾草も此類なるべし紙はあぶり爪を以て摩れば物を吸ふ皮革猶紙の如し部面は多く**ハルシヤ**皮を用るこころ西洋の常なり繭絲の箏弦最も**アレ**

キテルの縁を斷つに必要す乾腸の絃線は人の腸を干て絃線を造れば妙音出るとトヲマス名入の内景編に見たり猫狗暗中にて眼光る其他も皆エレキテルを避て受ず是を固有魄力品と云ふなり又無魄力の品類をも出せり左の如し

因に云漢土にて書の外題に孟子韓非子莊子と云へる如く阿蘭陀の書も大方作者の名を呼なり例は「トヲマス」ト「フランカアル」など皆作者の名を書名とす

千百の活物羽翼毛髪ありても皆無魄力なり金類半金牛石土類諸物の細末至微にして撫摩の因を斷に堪べからざればなり諸般の液質の脂阿芙蓉 ガルバヌム アムモニヤ以上二つは木源の名 阿魏 樟腦 諸般の微温を以て溶解すべきもの諸の滋濕の物 諸瀋の物是等は摩に堪へざるものなればなり

右の如く出せり鄭按ずるに所謂半金牛石とは原名ミネラルと云を譯せしなり其物石にも名け難く金にも名け難く其性彼此相交錯するをいふ例へば辰砂磁石カナノヲル碎銀爐の類なり又諸般の液質の脂

とは百藥煎だらすけ等をさす諸の瀋物とは酒酢油尿これに屬す鄭が試し中に伊豫の扶桑木石膏青竹等も無魄力なり鄭おもへらく樟腦は有魄力として佳ならん然所謂は三寸計りの硝子の筒に樟腦をかたく



つめ上下より銅線をさす事○かくの如くし中間貳分程をあら

け上なる輪をエレキテルの鐵衡に掛け下なる輪に鍵條をつけ席蕙に垂らし魄力を起し見るべし中間二歩計りの所へ火を現はすなり是有魄力の徵ならずや然れども樟腦を火に温め煙氣發るときは其陽氣を受けて已を焼くものなり此ときは無魄力とすべし此事後の發煩藥を燃すの條々にて考ふべし因に云塗物は無魄力にて火を受る物なれども漆を松脂にくはふるときは有魄力となり且松脂の破裂を防ぐに宜し猶外にも此類あるべし又有魄力の品も粉にすれば無魄力に屬すべし硝子絹糸は元來有魄力なれども小粒なる珠數となし絹糸にて繫ぐ早やエレキテルの氣斷と能はずして無魄力に屬するなり亦もろく

の有魄力品に水を注げば皆無魄力品となるなり乾竹は有魄力なれども青竹は無魄力なり是を以てすべて乾物は有魄力濕物は無魄力なりと知るべし人身すべて無魄力にして火を受ざる處なきに只唇のみ有魄力にして火を受ざるなり但し唾をよくぬぐふて試むべし此事「ウーヘンスコヲル」といへる蘭書に出たり亦鄭試るに爪の指につきたる間は無魄力なれども抜て離れたるは有魄力なり髪は有魄力なれども鬢附の付たるは無魄力なり

風玉を試る圖

風玉は水二合ばかり入べき硝子の陶なり口に軸を設たり其軸を「エレキテル」の鐵衡に當て五六十度廻し氣のこもりたらん時手に乗せ一方の掌を軸の上にもてゆけばひやくとして風



を吹出すなり發風子の製し様傳授の卷にあらはす

唧鳴子を試むる圖

なき玉は風玉には少し大なる壘より聲を出すなりこれも軸あり風玉の如く氣をこめ手にのせて耳に近ければじり〜さむしのなく如く鳴くなり又虫の音玉ともいふ造様傳授の卷にあらはす



百人嚇の圖

百人おごしは阿蘭陀舶來の「ウエイゲメント」にて水壹升五合ばかり入るべき翠色角ふらすこを用ゆるなり中に薬を入軸をさし瀝にて口を封じ金がいにて外を張り是を「エレキテル」に掛ること左の圖の如し

○此器これ迄發嚇子ひびりだまと稱せしを鄭幸かべさなりに合壁あはせなる訓蒙くもん讀師よみしに於て百餘人ひゃくじゆを列て試る事を得て更あらためて如此號たり

襖障子あはせごしに百人嚇ひびりを試る圖



エレキテルをば如此襖あはせのこなたにて輓轡きしりまはすなり

但し百人嚇ひびりを鐵衡てつこうにあて左右の眞鍮筒しんすうとうより各鏈條れんじょうをこりて襖あはせの引手ひきでと縁えりをつなぐなり引手は金具かねぐにすべし勿論へだての板いたを穿ち針金はりにて裏表の縁えりをつかけ角フラスコかくふらすこに氣を十分くりこみさそひ金を傳つたひ金にあつれば火ひを出す此こき次の人々ひと悉驚しつせいくなり次の間の圖此の如しこれ鄭ていが隣家りんかに於て試たる所の圖なり

因に云此發嚇子ひびりだまを用ひて狐



狸の人に魅たるを除く又西洋にては瘡

をおこすに

用ふるに

大に功あ

り又蘭書

には數百

人を列ら

ねて試る

ここを説

けり百餘

手をつな

ぎし圖如

此し少し



にても縁のつゝ
かざる所あれば
毫も應ぜざるな
り故によくく
縁をつゞく様に
すべし
經算火箸竿鏢等
の金物るいよく
縁をつなぐ其外
扇子きせる等は
よろしからず





フラスコの水にて人をびつくりさする圖説

水三合ばかり入べきびいごろの壺に水を九分目に入れ眞鍮玉の栓を紙にまきて口をつめるなり但し栓の下に鑊を下るこゝ圖の如し水につかる様にすべし



扱こ

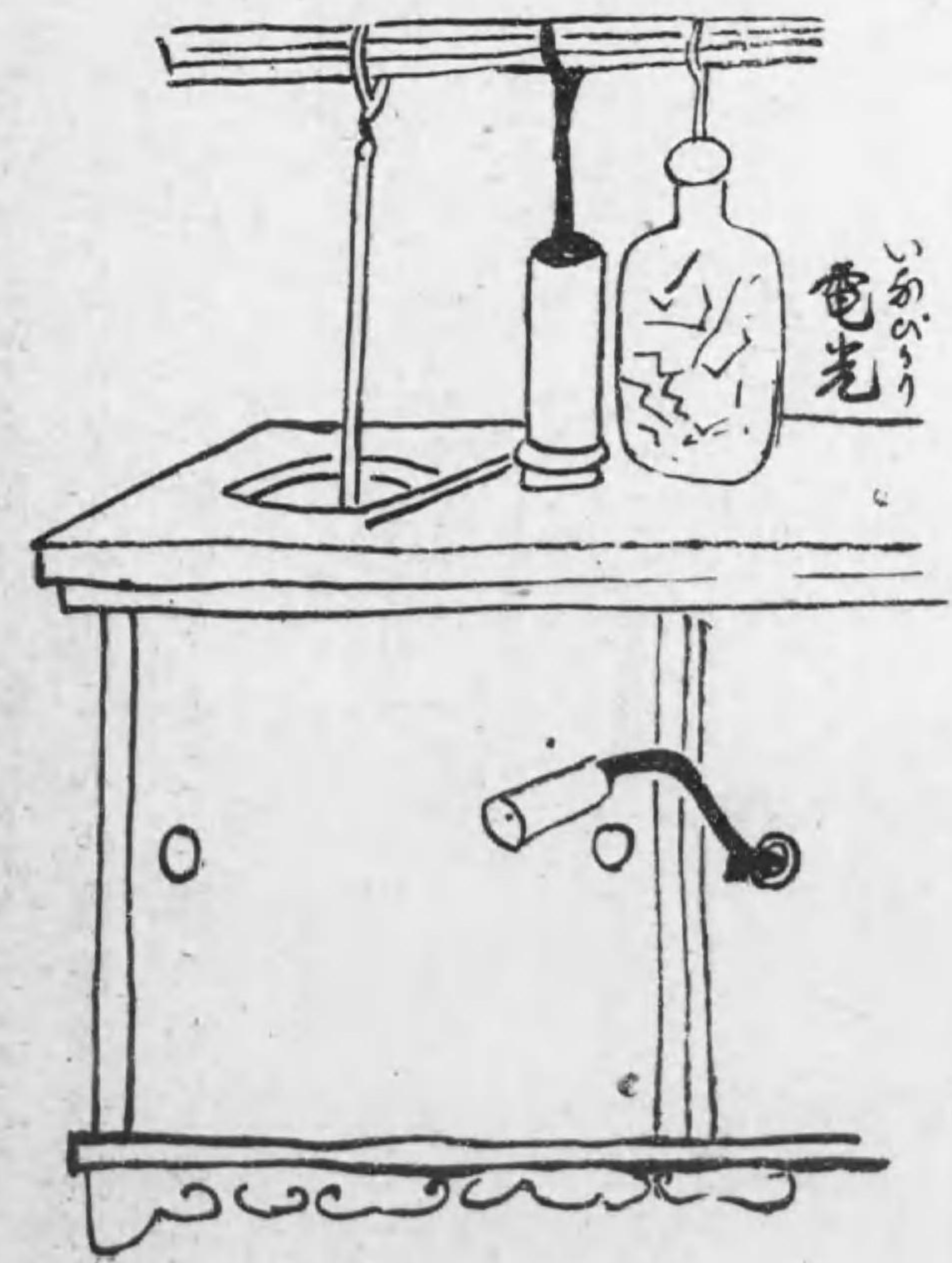
の「フラスコ」を用ゆるまき指にてよくくのごふべし手あかなごを甚嫌ふものなればなり右のしんちう玉の所をば「エレキテル」の鐵衡にあて氣を十分にくりこみ片手にてすべて人に渡すべし請る人も片手にて扱一方の人指を以て上の玉に觸れば愕然して左右の腕に應ふるなり



扱一



これも一人にはかぎらず五六人も手をつなぎてだにあればこそく
く應ずるなり扱此ふら
すこを**エレキテル**の左
のしんちうの筒にそへ
て鐵さほより鑠を以て
しんちう玉に縁をさり
氣を十分にくりこみく
らがりにしてさそひ金
を傳ひ金にあつれば**フ**
ラスコのはたへいなび
かりをあらはすなり其
火の色實に虚空のいな
びかりにこそなること

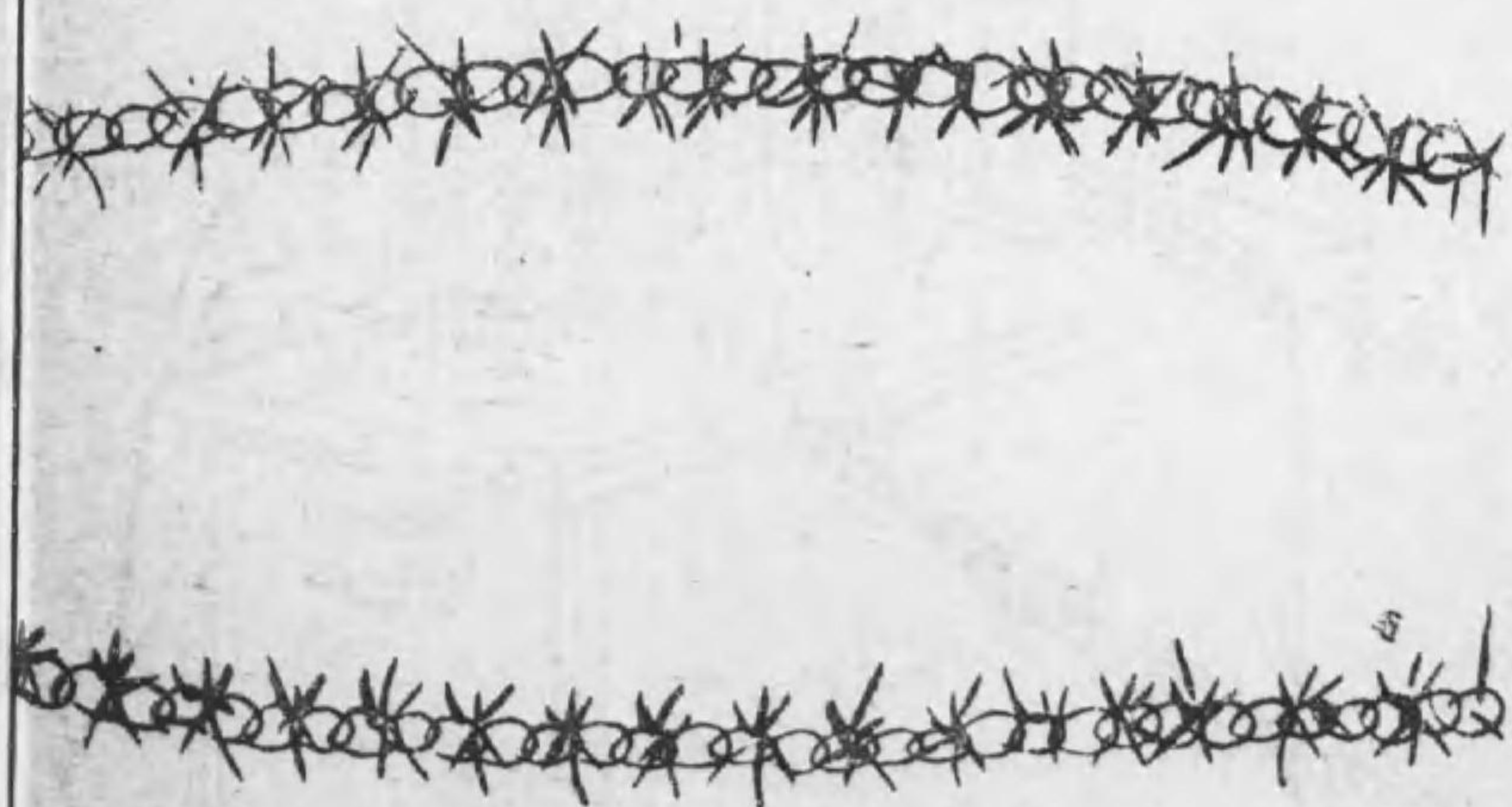


いなびかりは
天地の間の魄
力なること今
眼前の態にて
究理すべし



連綿火の圖説

連綿火は長さは八間の
連鑠をつくり左右の眞
鑠筒の前なる環にかけ
圖の如く人に引のばさ
せ百人嚇を鐵衡に添へ
て氣を十分にくりこみ
勿論暗申にして例の如
く誘金を縁金に當れば
即ち八間の鏈に連綿に
火を現するなり連環鏈
の製法は鐵鏈貳寸づゝ
眞鑠鑠參寸づゝ次合せ



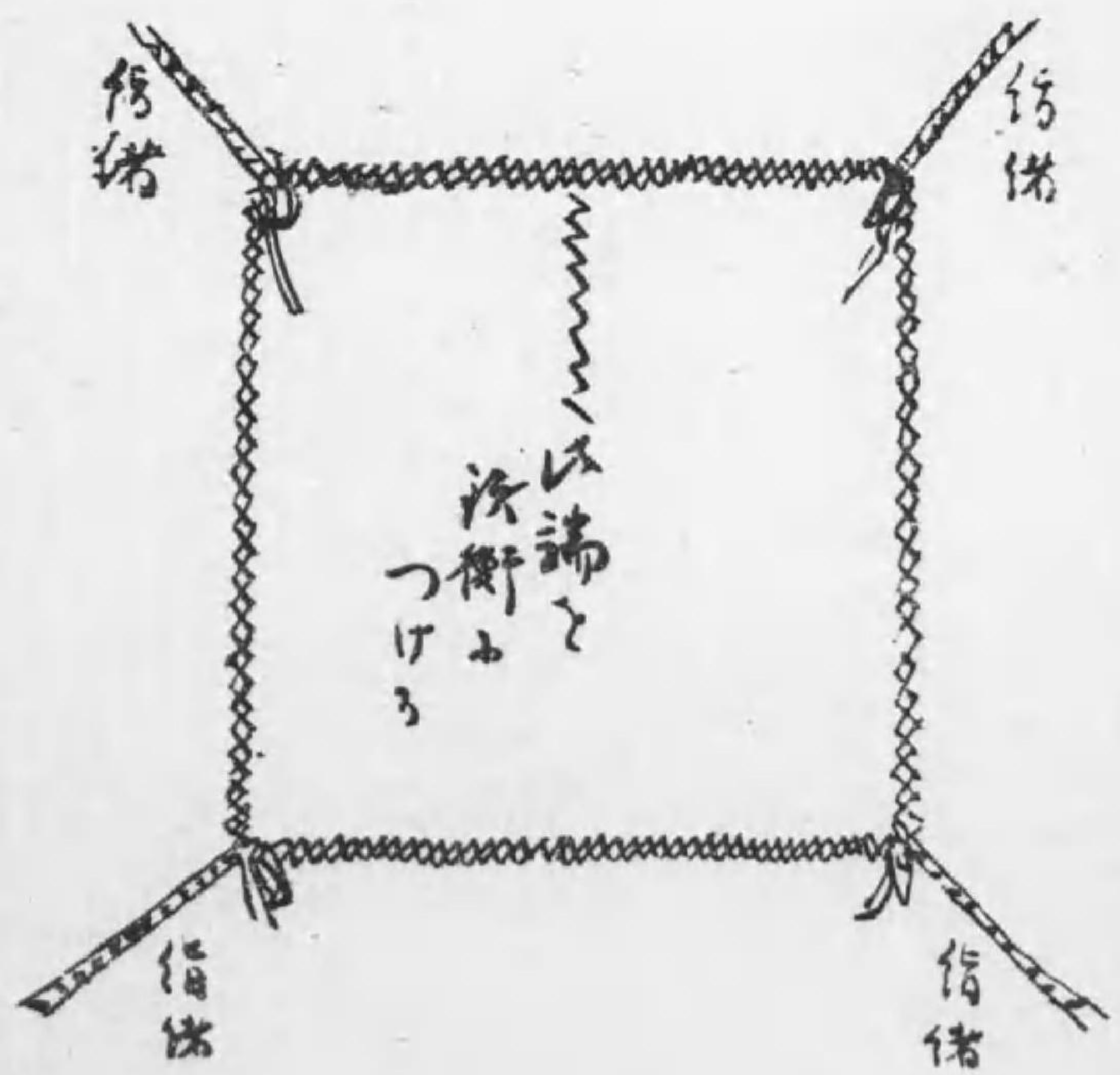
たるものなり傳授の卷
にくわしく記す但し八
間よりは五間五間より
は四間みじかく拵らへ
たる程火の光自明らか
なりこれは氣を含蓄す
ること深ければなり扱
又此鑠を次の圖の如く
室の四隅に結紐を以て
釣に蚊帳の釣手の如し
又ひさすじの鑠をつけ
其端をエレキテルの鐵
衡につけエレキテルを



まわし人の指にても或
はかんざし又は火箸に
てもくさりの近き處二
三分ほど寄ればちば
ちとなりて火の條を出
すなり

これには百人嚇は用る
にあらず
これを以て世に火柱と
いふものは天地の魄力
なること知るべし

連環鏈を引なる人は
如圖竹の輪に通して



持べし然らざれば手
に響きてよろしからず

フラスコの内へ雨氣
を呼圖説

水一合ばかり入るべき
硝子の至つて薄き壘を
用ふべし眞鍮の火箸の
如き頭のある軸に針を
さして倒にさし先燈心
五分計水にて潤し底へ



洗衝つけろ

落ちて軸には紙を巻きて口を封じ絹裂にてよく壘をすりぬぐひ
温くなるを度として圖如く鐵衝より鏈條にて縁をこりエレキテルを

起發し氣をこむるときは硝子の内壹面に水氣生じて汗の出たるが如し是以知るべし雨は天地の魄力に因ることを

鄭按するにエレキテルを譯すれば琥珀のこごなり漢人琥珀と號るここ則枯魄の音を假れりと見ゆ既に薄荷の嚴酷たる性を見て酷薄苛虐なるを以薄荷と音假りて號けしこごなご漢人も往古は究理せざるにはあらず道德仁義の大なるに非ずして鄙事に多能なるを耻るが故技工の究理を避るご知べし

阿蘭陀始制
エレキテル

究理原 卷之一 終

和蘭陀始制
エレキテル

究理原 下之卷 目錄

- エレキテルの氣灯をつたふ圖
- 人の體より火を出し針灸の代りにする圖說
- エレキテルの氣にて紙人形を踊らする圖說
並金箔を宙にたもたす辯
- 同火の力にて蛙鼠雀等を氣絶さする說
並雷死の說
- 磁石をおごして吸たる釘針を落さする說
並矢の根石天狗の爪の辯
- 擊雷聲の傳
- 濱やき鉢に堪たる水より火を出す圖並不知火の辯
- フラスコ電を發する圖



に松脂を敷きてもよし
 又は阿蘭陀にてこしら
 へたるびいざろの四足
 もいよ〜よし然れど
 も今爰に便利なる製法
 あり左の圖の如く一尺
 四方程なる板二枚の間
 へ制詣を挟むなり但し
 上なる板に金具を張り
 環をうち鏈條をかけて
 縁はすれば載たる人の
 體より火を出すこと圖
 の如しさて其制詣の厚

以乃ハ、セウ
 惣カ、何カノ所
 一、一、カ、所、ク



さ貳寸ぐらいにすれば火の力強くして而も双方にこたゆるゆへ頭痛
肩癖其外氣滞りて脹疼をなし或は何さも號なけがたき痛み處ある人其
外何れにても患ふる所に當つれば發散して即座に快よし西洋にては
眼病などには此法を用ふるよし見へたり

エレキテルの氣にて紙人形を踊らする圖説

左に圖する所の天蓋形の器は眞鍮にて作るなり先眞鍮の板二枚を各
々四隅に穴をあけ四所とも絹糸にて釣るこま圖の如し其上下は鏈條
なり扱これを天井裏又は鴨居に圖の如くつるし下げ右の楯盤に乗た
る人下なる鏈條を手に取れば中なる紙人形たちまち踊出し或は舞ひ
或は翻斗さんぽうするや見る人絶倒せざるはなし手を離せば則止む扱此器に
金箔の小片を以て人形にかへエレキテルの氣を強く起すときは其金
箔上にも下にも附かず宙に飜りてあるなり奇ごいふべく又妙ごいふ
べし



エレキテルの火の力にて

蛙鼠雀等を氣絶させる説

是は百人様だめしを用ひて鐵衡より圖の如くしんちう鏈條にて縁をさり百
人様の頭の所に別のしんちう鑠を巻き其はしを銅杓子の頭につけ蛙

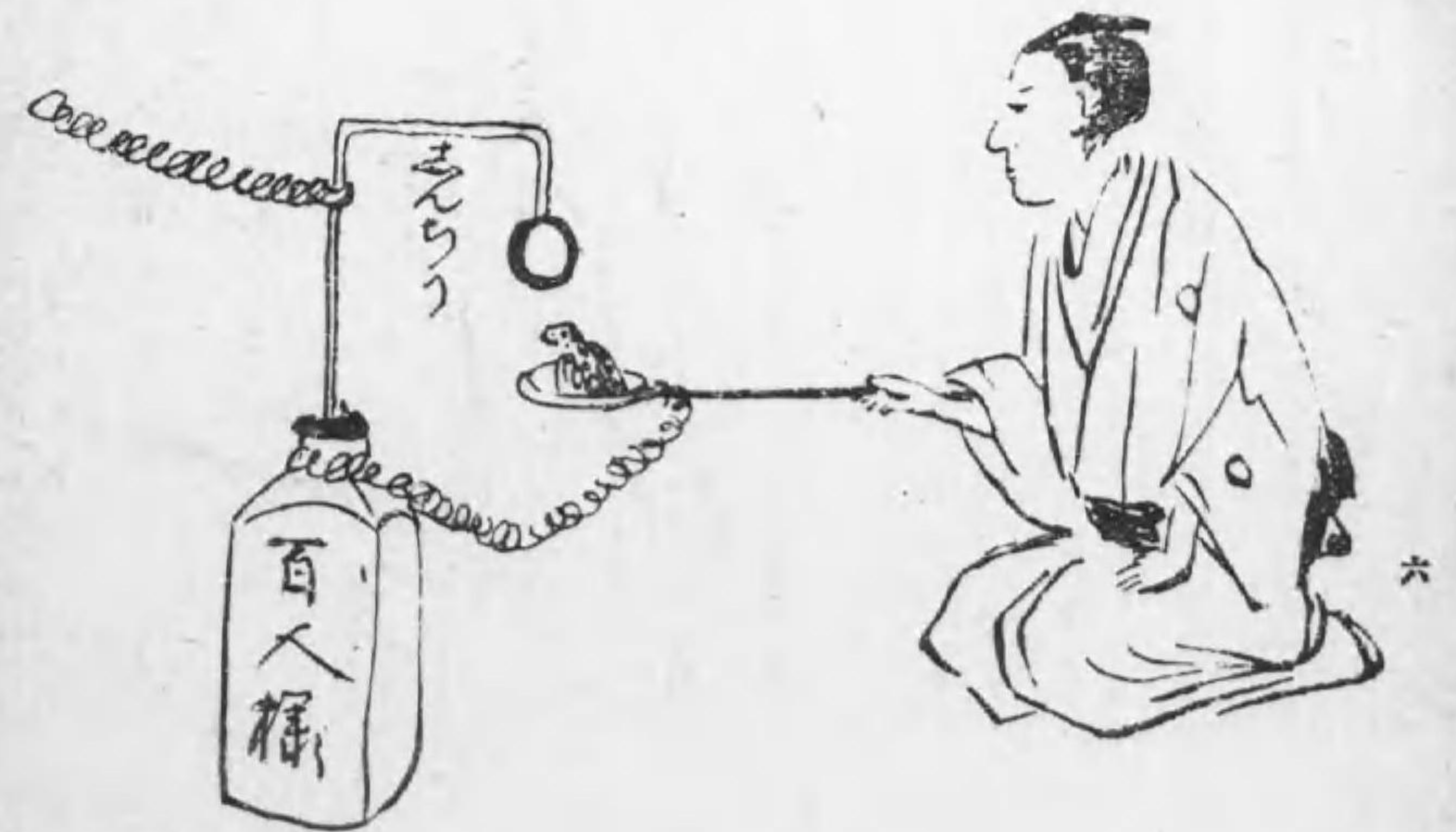
の額を當れば玉より火出て、忽ち氣死するなり鼠雀は百人様のくさりを脚につけ指にて鼠の頭をつまみ鼻梁を當つべし人の雷に撃れて氣絶するも此理に外なし雷は即ち天地間の魄力なればなりと知るべし

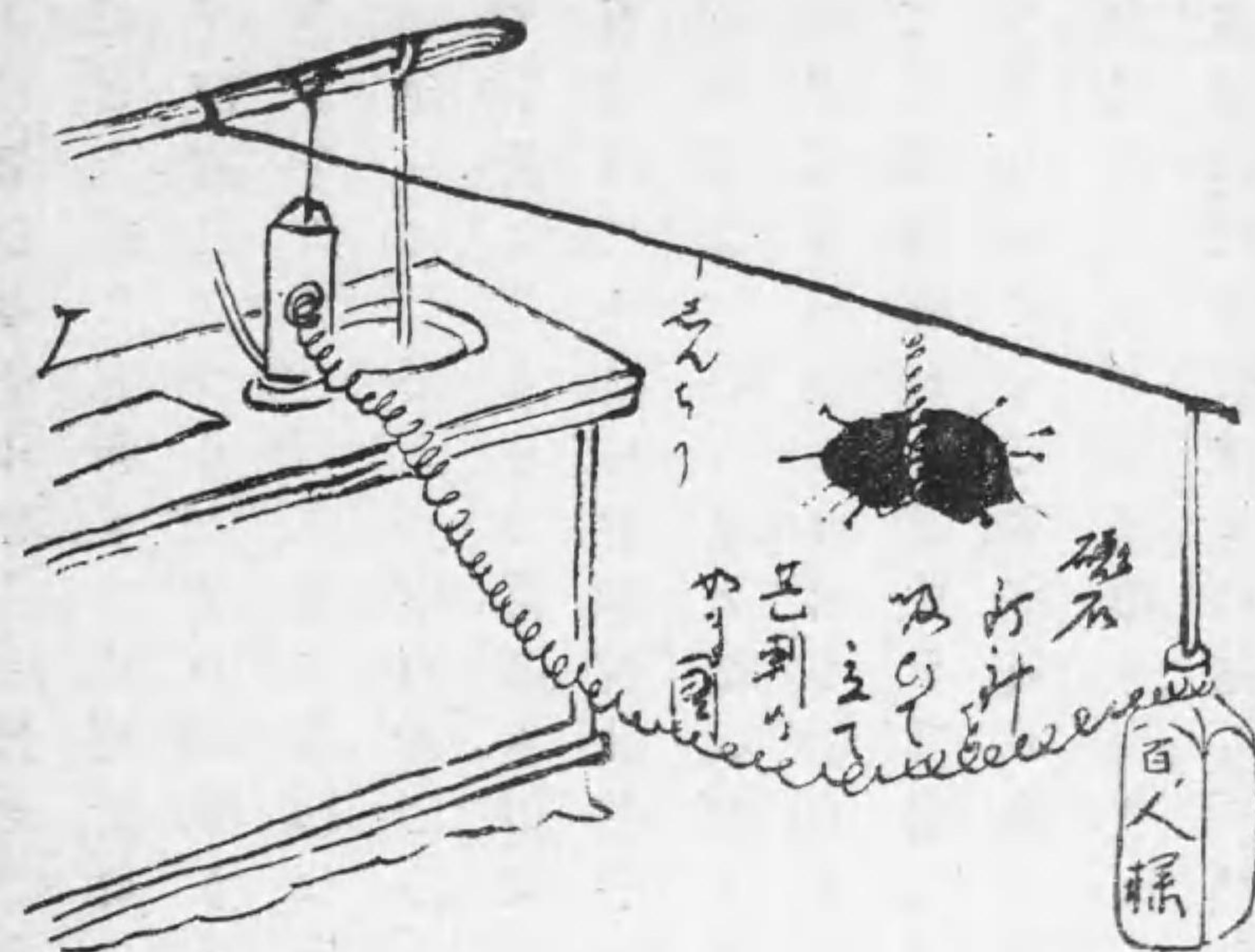
磁石をおごして吸たる釘針をるいを落さする説

並南北を指す力をうしなふ辯

先隨分石力の強き磁石に釘針なごの類を吸はせ圖の如く備へて

さてエレキテルをくり起せば電氣百人様に充滿すれば釘針は上下左右に立つものなり此時さそひ金を以てつたひ金に當れば火を出すとひとしく磁石おごろきて釘針はばらりと落るものなり扱世間に矢根石、雷斧石、霹靂磁、天狗の爪などいふは天地氣和し相輾りて後虚空より落る所のものなり是此磁石の釘針を押揚し又落すの理にして本宇宙の魄力を以て吸上たりし瓦礫を再び雨らすなれば奇とするに足らず然れ





八
 ども人々唯異むのみ琉人雪を知
 らず北胡の春秋稻麥實るを異む
 に等し

常の羅針盤をかくの如く
 楠盤の上に置きて氣を起
 せば南北をさす力を失ふ



濱燒鉢の水より火を
 出す圖

はま焼鉢の外をよくくぬ
 くひて水を湛へエレキテル
 の雁股より圖の如く針かね
 と鏈條にて縁をこり鎖の端
 を少し鉢の水につかるやう
 にし水面に指をもて行けば
 二三分にして火を顯はすな
 り 是を以て見れば筑紫の
 不知火、丹後の龍燈其外暗夜
 に海上に火の顯るゝも皆空
 中の魄力なるを推して知る



べきなり 凡諸國の七不思議は何れも魄力有無の感動より外なることなき歟

南京伊萬里本山燒の類は魄力頗る強くよく傳ひを阻つ若し雷盆銅盤などを用んご欲せば下に楯盤を置くべし然らざれば縁を斷つことあたはず

擊雷聲の辯又云ふかみなり

擊雷聲は五六合入のびいごろ壘を用ふべし内に藥を盛りしんちうの軸をさし金具にて外をはり前の雨呼術のごくする歟又は圖の如くぬりもの金具等の臺に乗せてもよし扱**エレキテル**の氣此**フラスコ**に充滿すれば口を封じたる詣の處へ大なる火を發す其聲甚だしく實に傍の人を拂ふなり壘大なれば聲いよく強し爆聲二百歩の外に聞ゆご蘭書には見へたり此器の製造方最も肝要なるが故に傳授の卷にくわしく記す

右擊雷聲及び次の圖の發電子等もし遲滯して爆かざることあらば花瓶の身より**エレキテル**のしんちう筒なる環に別に鑲條を以て縁をこらすべしかならず爆こと妙なり此理は傳授の卷にくわしくあらはす

エレキテルの壓鐵つよ

く革枕堅實なれば爆聲

甚だ大なり實に二百歩

に及べし



フラスコ電を發する説 發電子いんぴかりだまと云

發電子は前の擊雷聲より少し小なるびいごろ壘に藥を盛りしんちう玉の栓をさし外にもしんちう粉にて包むこと傳あり扱て用ゆる法は右擊雷聲をつかふ如くしてよし又は楯盤に乗りたる人の指より氣を



こむるもよし氣充滿すれば自電をあらはすなり又楠盤の人金の匙にて玉を壓へ氣をこめ玉をつり下げ壇に觸れば必電發するものなり各圖を考へ合すべし發電子製造の法傳授の巻にくはしく記す

水の點滴暗中にて光る圖並流星の辯

玲瓏硝うららかに云ふものありこれを水にひたし絹糸を以て天井より釣り下に盥をうけ扱て**アレキテル**の鐵衡よりくさりをこり玲瓏硝につなぎ其室を眞暗界まごころとなして**アレキテル**を輪轉せば滴たたりせはしく落出して白く光るここ流星のごとしこれに依て知る流星は水氣冷際に凝りて氷の如くなるに虚空の魄力是れに感じ光をあらはすなり之れを友人大矢某右の玲瓏硝に代へて古終ふるまひを用ゆ又簡約なり

阿蘭陀に四球の大**アレキテル**あり是にて試る時は滴甚だあきらかにして受たる盂盆の形を辯別すこいへり此事ボイス云ふ蘭書に出たり此頃友人間氏四球の大**アレキテル**を製造れり火強く炎甚し

鉛糸



エレキテルの火にて燐耐を燃す術並雷火の辯
 從來エレキテルの火は陰火にして物を焼こす能はずといふ人多し然
 るを今蘭法によりて試るに陽火にして尋常の火に異なることなし然
 れども唯微々たる弱火にして炎々火力なきのみ竈下を燃すに初に薪
 柴へ附木のみにてはうつらざるが如し肥杉の脂斷又は焚附を何にて
 も火口こし附木も火うちを用ひ鐵砲に口藥あるが如し扱焼耐にうつ

すの法彼蛙を氣絶
 させる條下に示す
 如く百人様に氣を
 くり込て銅の斗子
 に焼耐の極上の處
 を七ひしんちう玉
 の下より受べし玉
 より出る微火焼耐
 にうつりて壯なる
 青炎をあらはす焼
 耐は硫黃の氣ある
 を以て其炎青し是
 を以て見れば雷火



の物を焼こご本地
下に含蓄せる硫黄
焰硝の二氣蒸々こ
して起るに當て空
中の魄力即雷火互
に感ぜざることを
得ずして喬木を焼
き浮塔を回祿する
に至る

燒耐にうつした
る火にてたばこ
をのむ圖



鄭按するに喬
木浮圖の雷火
の災を考るに
全く尋常の火氣に乏しく灯火食烟に遠き寺院浮圖故なく魄力品

の魄力火をむかふるに等し天災を受く民間既に迅雷の時は線香
をもやし灯火を輝てらし降邪香を炷くも我を有魄力となして彼
の雷火の食烟多く灯火の諸火炎賑はしくして雷火の回祿の恐れ
なき仁風の春艸を生育し給ふ難有ためしならずや仰ぎ國恩を思
へ

右の法を以て硫黄松脂石腦油に至る迄燃燒せしむること傳授の
卷にくはし

エレキテルにて發煩藥を燃す術

右の燒耐を燃すに同じくして少しく異なるは鐵杓子に鯨の柄をすげ
匙子の頭に圖の如く鏈條を附くべし之れは手にひかざる様の設け
なり而して鐵炮藥を極く細末し亦一藥を加へて火を速に導くものあ
り鐵炮藥は朋藥よりは口藥を用ふべし亦火にささき口藥の一方あり
俱に傳授の卷に載せたり

左に圖する處は鐵炮藥に移りたる圖なり藥は二三分を盛るべし一匁



を燃せば其仰山なり又之れに鐵粉を少し加れば火花散て甚見事なり
こゝに鐵杓子を用ふるは鐵の性はよく火を吹く故なりと知るべし

エレキテルの氣自然と鐸を鳴らす術並地震の辯

此器を「ウ、ヘン」といふ蘭書に「ミユテーキコロッケン」とあるは自樂鐸
といふ義なり

但しエレキテルをはなして鳴らす法は鄭が愚意に出たり

扱此鐸架は木にて造り漆塗にし鐸は響銅にて造るなり其餘は皆しん
ちうなり下なる空壇は硝子にて五合入位にし六七拾目より重きは悪
し之れにしんちう玉の栓を紙にて巻きつめるなり但し夏日は水を僅
に一二勺入るゝを妙とす是も外を金具にてはるべし扱用ふるに望ん
で空壇のしんちう玉をエレキテルの鐵衝に添へよくくゝ氣をくりこ
み圖のごとく架に置けば其鏈條を昇りて兩舌動いだして三鐸自鳴て
止ず氣力衰ふるを見ば急に百人様に氣をくりこみ圖の如く携へ空壇

のしんちう玉に一たび添へて取退くべし忽ち勢ひまして又久敷鳴るなり三鐸の仕かけと空壇に金具の張りやう及しんちう玉のつめやうくわしく傳授の卷にあらはす

○天地の間に魄力起りては此器の如く氣を動搖す初夏寒き時は地中の鬱火殘寒と相輾り魄力を起す故霹靂す之れを地震と云初冬の溫熱も氣和せずして如斯ゆへ同じ西洋の地中海に沿ふたる地は常に地震多しといへり是其地方に「ペイリテス」といふ石多きが故なりと「ボイス」と云ふ書に出たり此「ペイリテス」阿蘭陀にては「ヒユルスデエン」といふ其詞譯すれば火石と云義なり

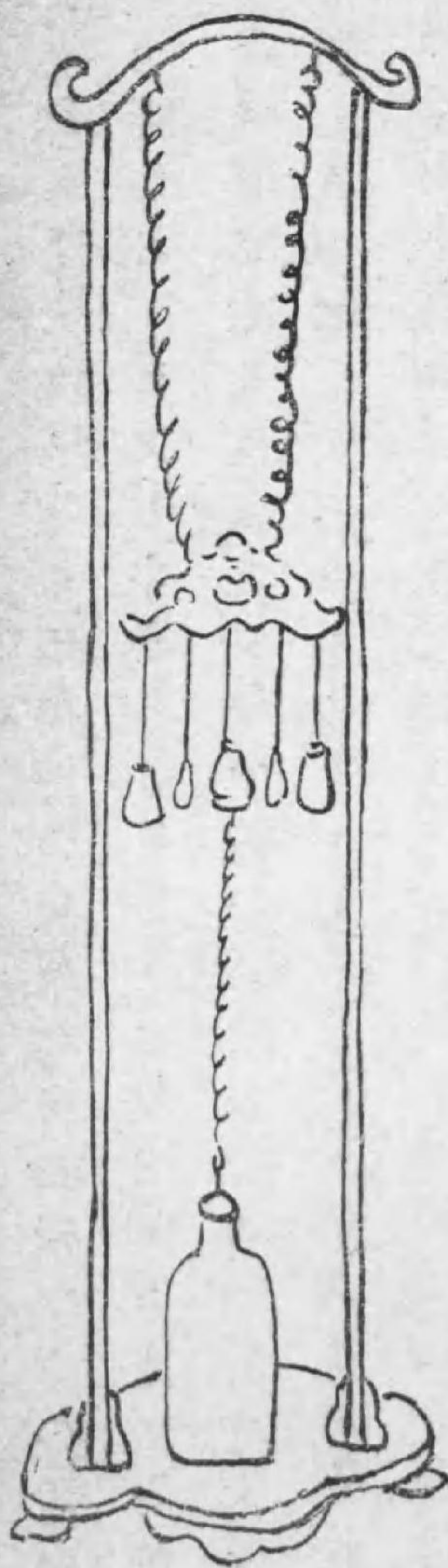
鄭按するに我國にて「アエ」といふ金色の石を「ペイリテス」と云ふべし此石魄力强くして甚よくひんた燃すなり又本朝にても三四里山上に民居する處の樵者のいへるは其地甚だ地震多き日とじていさゝかにてもゆらぬ日なしと云り全く之れ「ペイリテス」の多くある山

岳にして硫黃の氣と相扶くと見へたり

右の鐸架は前に圖したりし天蓋形を掛代へ此空壇を施せる人形ひこしほよく頤頑且久しく躍るなり

エレキテルにて五星運行の理を示す圖説

五星は天を楕圓に運るものなり其



の理の究め難きこと久し茲に阿蘭陀の理學の書に示す處の説を擧るに天に引力彈力にて即**アレキテル**の氣にて自然と輕きものを挽回さするに必まざるならずして楕圓に巡ることかくの如し先大なる厚き楕盤を製し其中心に大鐵丸を安し**アレキテル**より鏈條をこりて鐵丸に觸らしむ此法鏈條のはしに絹糸をつけ其絹糸を以て鐵丸へ鏈條を繋ぎ氣を受けしむること久しくして而后鏈條を除るこいへごも其氣鐵丸に寄着て且楕よりも氣を起すものなり此時加賀に柔輕腹毛の羽を結びつけ鐵丸の側に寄んとするに彈き返して楕圓に廻れり茲に鄭が所持の器の小なるを以て僅に一轉するのみ大なる器なれば數回

空鐘く瓦力を
くいさるの氣



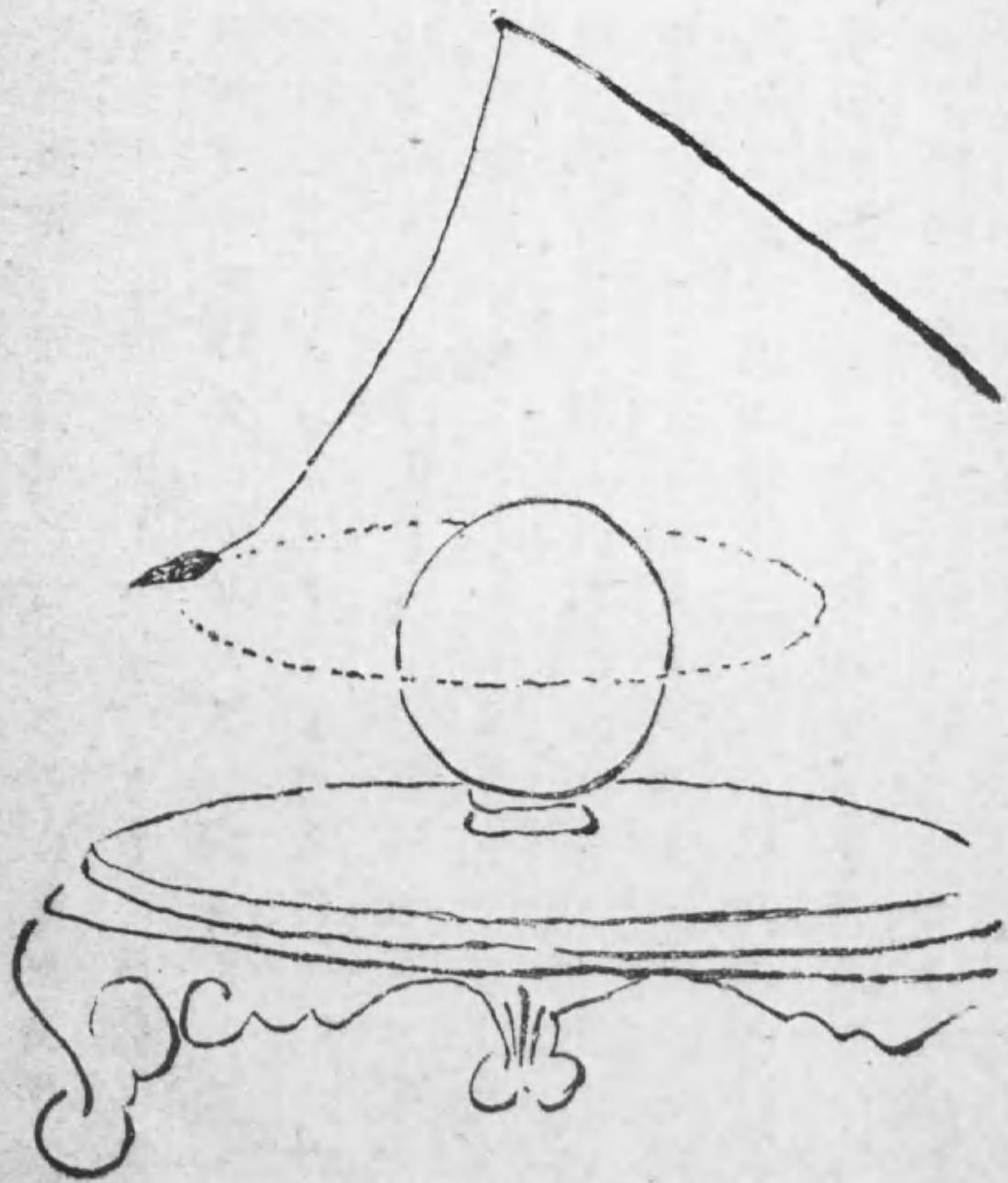
旋轉するご蘭書に實見あり五星運行の楕圓に巡行することを初めて先人未發の試法を按出せしは「ステヘンガライ」ご云人の檢出せりご云へり

アレキテルにて諸病を療治する説

アレキテル療法を頃日人に試むるに小腹股脚等の麻痺くらひは治し
いまた頑なる症を治するの暇あらずこいへごも其氣人の肌膚筋脉に



透徹滲通する故に或は
 下痢し或は發熱するこ
 ぞ「ボイス」に見へたり故
 に病を治する效大なる
 べし夫病は天地の雜氣
 を受けて外來の邪を感
 じ風寒暑濕燥火の六氣
 の過不及に疫せられ亦
 内七情に傷れ或は寒熱
 し或は虛寒し或は變に
 或は恒に或は奇に或は
 正に或は鬱に或は散に
 或は急に或は緩に或は滑に或は秘に或は滿に或は缺け何れ常に變れ



るを疾病とする故に熱病のもの快氣するを常に復するを云て平復本
 復さ千載謂來れるは是なり然る故にこの**エレキテル**の正氣を受け温
 動させしめて陽氣を滿しむる時は豈艸根樹皮の煮汁火金の針灸の微
 術にはまさらざらん哉鄭初業を先師に受く父母妻孥を糊口しぬ漸く
 壯歳に及ぶ比をひ初めて今の師に隨順して蘭學に志せしよりいまだ
 この**エレキテル**を以て諸病を療するここを試ることを得ず是れ鄭が
 懶惰にあらず常に反せる治術故道に合さずるを病家許さざるが故空
 敷いたづらならしむる日多きを憂ふ本朝の俗前廉より**エレキテル**は
 治療の器なりと云傳へしも宜なり今其效能を考るに神經不利の病症
 を治するに必せり曾て吉雄氏が記せる一書に一老人六十八歳膀胱の
 閉塞筋不遂して頑強なる遺溺を患ふること久し諸翼方を盡して驗な
 く**カンタリデス**必治の薬なりすら效を奏せず術計爰に盡んとするに**フロウウ
 ルボス**聖師の名なり此病人に**エレキテル**を試し所に氣に感じて其脉甚駛數に

なりし故四月十二日に始頻々ご用ひ五月四日に至りて全く平癒せし
 事をくはしく載せたり「ポイス」には卒中及中風を治るごあり「ウウヘン
 スコヲル」には發赫子にて瘡を截す事を載たり其外眼病徴等にも用ふ
 る事あり鄭謂らく發赫子にて小兒の急驚風を治すべしご然れごも奇
 なる治術ゆへ病家これを許さず故是亦試るごを得ず後の君子是を
 試み給は、幸甚ならん

百尺の鐵串にて天の火を取る事

是も鄭が譯文にくはしく見ゆれごも茲に其要を撮み且圖解して示す
 事左の如し是も彼邦の「フランキリン」なる人檢出なりご「ポイス」に出た
 り是は天氣風波の時に用ゆるごごなり
 或問曰蘭書に説さいへごも百尺の鐵串何に因て歟虚空を的ごして建
 ん全吾子が譯の差ふものならん歟鄭答曰陰天ご大虚の魄力なり魄力
 の鐵を吸ふごごなを磁石の如くなり必立て倒る、ごごあるへからん

歟雷火の浮圖高閣に移り易きも中
 天の魄力の吸引なり以て推べし



泉洲熊取谷にて天の火を取たる圖説

泉洲熊取谷の莊官中氏は鄭が舊知己にして頗る理學を研究する人なり曾て愚譯の書を講じ又鄭が微力にして諸術を試み得ざるを慷慨す中氏境内最廣し高さ十九間の孤松あり是によりて天の火を取らんことを創意し終に果しつることを得て圖して鄭に贈る所かくの如し猶

桶を挿入し竹を以て相を松の枝にくりしる也



松樹十九間あり

谷

天の火は人々
ついでして
人々出も



松樹の幹

浪花に出て其愉快を告ぐ圖は同臭の岩橋嘉孝今は故人が畫しをこゝに寫す石に火あり金に受く石に火を現せず金に火の形容なし然るに燧て火をこる燧人氏の創業億兆の年を経たり眼鏡を執て太陽の火をこる事眼前に賢愚見て怪まずこれ何の魄力ぞや其體を見て怪まず用を見て怪みなすは狐狸に恐れて天命に恐れざるものに同じ

受業生

平田稔則政筆記

田宮禎宜哉畫圖

跋

或人議唱西說者曰翻譯之學世未得其傳也故語倫猶未辨文意亦未明也是以其所爲譯者往々與實背馳橋本氏之輩亦未免此失也故曰夫言之實在事文者言之花葉也能誦文辭能通言語者如其意不會其事不成則何益之有焉未達文辭不通言語亦能得其意能成其事則何事之有越禮紀低兒雖傳於我邦不知爲何物也久矣橋本君於西洋書中得其說既誦之既試之一一相符如夫不得其言則何以成其事自今以往將以是證之或人歎伏曰然則其所得之說宜梓以示海內焉奈何曰予未知橋本君之意也雖然與衆樂之大者也世何沮之乃強獎之於

是以國字。記其說。翼以圖畫。使人各得製其器。而試其用。解其意。而知其實矣。其功豈不偉乎。遂以為跋。

文化癸酉之春

蘭窓逸人謹撰

524
196

大正十四年四月十日印刷
大正十四年四月十五日發行

非賣品

不許
複製

編輯者 兵庫縣武庫郡精道村芦屋字樋口新田七三五ノ一
三崎省三
發行所 大阪府北區伊勢町一三
印刷者 久米武
印刷所 聚文堂
久米印刷所
大阪府東淀川區本庄町五番地ノ三
電話北二五二六番

エト7M-63

終